調

三年

画数 15

筆順 訁 訁 訁 調

オン チョウ

クン しらーべる・ととのーう・ととのーえる

成り立ち

〝周〟は、〝用〟と〝口〟とを組み合わせて作った字で「口（ことば）をうまく用いて、ものごとが〝うまくいく（ととのう）〟」ことをあらわした字です。

ところが、この〝周（4年539）〟が〝行きとどく〟といういみから〝めぐる（まわる）〟といういみにつかわれるようになったため、この〝周〟にさらに〝言〟をくわえて〝調〟という字を作り、これで〝ととのえる〟といういみをあらわしました。

「うまくととのえる」ためには「よくしらべておく」ひつようがありますので、〝しらべる〟といういみにもつかうようになりました。

また、「歌の〝しらべ〟」から、〝調子〟〝ハ調〟というようなつかいかたもされます。

使い方

▽調停が調って、長い間のあらそいがおわりました。

▽調和のとれたふくそうをすることがたいせつです。

▽きかいの調子がへんなので、さっそく調査してみます。

熟語例

▽調停（あらそいの間に立ってかんけいを調え、あらそいを停止させること。）

▽調和（すべてがつりあうように調えられていて和やかにかんじられること。）

▽調整（整は「正しいじょうたいに〝ととのえる〟」こと。よく調べて正しいじょうたいに整えること。）

▽調査（査（5年714）は「調べる」こと。明らかでないことを明らかにするために調べることです。）

▽調子（子（1年28）は〝帽子〟の子と同じでとくにいみのない字。音楽の〝調べ〟。「音の高ひくのぐあい」のいみから、ひろく「ものごとのぐあい」のいみにつかわれます。）

▽調子づく（音楽の調べがうまく調って快い、といういみから、「いきおいにのる」「いい気になってうわつく」といういみにつかわれます。）

追

三年

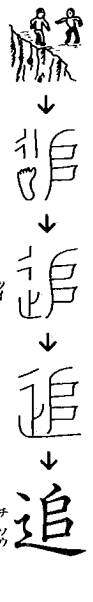
画数 9

筆順 ㇇ 戸 自 追

オン ツイ

クン おーう

成り立ち



がけの形をあらわした〝自〟（よこのせんは〝地層〟をあらわします）と、「道を進む」ことをあらわした〝辶〟とを組み合わせて作った字です。

けものをとらえるのには、行き止まりになっているがけにむかっておいつめてつかまえます。「がけにむかって進む」といういみの字で、〝おいつめる〟といういみをあらわしたものです。

〝おいつめる〟こと。〝おいかける〟こと。「あとを〝おう〟」ことです。

また、「人のあとに〝ついて行く〟」といういみにもつかいます。

使い方

▽むかし、六助というりょうしがおりました。六助はまい日、山おくへわけ入っては、けものを追いかけて、てっぽうでとらえるのをしごととしておりました。

▽テーブルの上に、ごちそうがのっています。おいしそうなにおいをかぎつけて、ハエが一ぴき、とんで来ました。追っても、追っても、ハエは、ごちそうの上にとんで来ます。

熟語例

▽追跡（跡を追いかけること。にげて行くものを追いかけること。「どろぼうを追跡して、みごとつかまえた」などというふうに、つかいます。）

▽追求（追い求めること。「人は、幸福をどこまでも追求して止まないものだ」などというふうに、つかいます。）

▽追放（追いはらうこと。追い出すこと。「むかし、ギリシャでは、人民が、わるい人を追放するという、せいどがありました」などというふうに、つかいます。）

▽追加（あとから、つけ加えること。「レストランでコーヒーを追加ちゅうもんした」などとつかいます。）